

琉球祖語*kaja考

ローレンス, ウェイン / LAWRENC, Wayne

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

28

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

2004-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012549>

琉球祖語*kaja考

ウェイン・ローレンス

1. はじめに

琉球方言学や日本語学の研究分野では、それぞれ琉球祖語や日本祖語に言及することは当然のことながらあるが、具体的な琉球祖語形や日本祖語形を実際に建てることはあまりないように思われる。この点は印欧語やオーストロネシア語の比較言語学の研究と大きく異なるところと言えよう。

祖語形を再建するという事は、複数の単語を一つの語形から導き出すことではもちろんあるが、祖語形をたてるために、祖形が個々の実在形にたどり着くまでの音変化及び意味変化を明示的に記述することになるのであるから、祖語形をたてる作業は、部分的ではあるが、言語史を解明する作業でもある。本稿では、南琉球方言に広く脈打っている「カヤ」と発音される単語を取り上げることとする。南琉球方言群特有の語形とされていたのだが、北琉球方言にもその同系の語の存在が報告されてきているので、琉球祖語まで遡る単語であると考えられる。異説のあるところだが、本稿で問題とする「カヤ」の祖形を諸方言形に最も近い音形に再建する。祖形の意味の断定は、地理的分布を考慮しながら、生物学における分岐分類でいう「最大節約法(英:maximum parsimony method)」に従って、変化回数が最も少なくて済む分析法を採る。

2. 南琉球方言形

南琉球方言群は系統的に二つに分かれると思われる。すなわち、「宮古方言群」と与那国方言を含む「八重山方言群」とから成るとされる。このうちの八重山方言群では、腕の一部、あるいはそこに感じる痛みという意味をもつ「カヤ」系の単語がある。

与那国	kaja	〈肩〉	(平山1988:195)
	kaja~kajabuni	〈肩硬骨〉	(沖縄国際大学高橋ゼミ1986:183)
新城下地	kaja	〈腕の下はく部〉	(沖縄言語センター調査資料)
	kaja	〈手首、関節〉	(沖縄言語センター調査資料)
古見	kaja	〈肘から手首までの腕〉	(加治工2001:29)
鳩間	kaja	〈肩の病気〉	(加治工1982:393)
黒島	tiinuhaja	〈手頸〉	(宮良1980[1930]:393)
大浜	kaja	〈肩〉	(平山他1967:364)

石垣	kaja	〈手の平の付け根。手首〉	(宮城他2002:195)
	tiinukaja	〈仕事で使いすぎて手首が痛くなること〉	(平山1988:446)
	tiinukaja	〈上臂、後膊、二の腕〉	(宮良1984:311)
	kaja	〈甲(手足の脊)〉	(宮良1980[1930]:253)
	kaja	〈足首 ¹ 〉	

新城下地方言の意味の違いは話者間のゆれであると報告されており、石垣方言の意味のばらつきも、地域差や話者の年齢差より、むしろあまり使われない単語ゆえに生じた個人差と見た方が妥当と思われる。

カヤがさす身体部位でいうと、八重山方言は、肩あたりの意味を表す方言と、手首付近を表す方言とに分かれ、ほぼ半々である。また、身体の一部をさす方言もあれば、病気・痛みをいう方言もある。鳩間方言のkaja〈肩の病気〉はkaja ukurun〈カヤが起こる〉のように用いられるという(加治工1982:393)。

南琉球方言群の宮古方言群でもカヤという発音の、意味的に関係のある単語は広く使われているが、八重山方言と違って、身体の部分名称には使われていないようである。

伊良部島仲地	kaja	〈神経痛。農耕作業などによる過労からくる後遺症や捻挫などの後遺症 ² 〉	
平良市下里	kaja	〈リューマチ。神経痛〉	(柴田(未刊))
池間	kaja	〈神経痛〉	(平山 1983:751)
多良間	kaja	〈神経痛〉	(平山1983:751;多良間村史1993:296)

仲地方言のカヤはkaja-nudu jam〈カヤが痛む〉とかkaja-ndu naïïï bui³〈カヤになっている〉というふうにするようである。また、その連濁形はdugaja〈体のカヤ〉、tiinufuzigaja〈手首のカヤ〉、cigusigaja〈膝のカヤ〉の複合語の中に使われる。

3. 北琉球方言形

南琉球方言に比べれば、北琉球方言のカヤ系の単語は、北琉球の中で周圈的な分布をなし、かろうじて生延びているにすぎないという観を呈している。沖縄方言群から次の二例が報告されている。

伊江島	haja	〈腱鞘炎〉	(生塩1999:324)
伊計	kaja	〈夜になるとからだの節々が痛む病気〉	(金城1982:47,62)

北琉球方言の奄美方言からは次の例が報告されている。

笠利町佐仁 cēpusēgaja <膝の神経痛> (狩俣2003:72)

ここのcēpusēは<膝>という意味なので、-gajaはkaja<神経痛>の連濁形であることがわかる。しかし、この語形は明治生まれのインフォーマントから採録されたもので、大正生まれの話者はこの語を知らないという。

4. 音形と意味の再建

八重山の黒島と沖縄北部の伊江島のhajaのhは両方とも独自に*kからの変化であるから、諸方言のカヤ系の単語の琉球祖語形として*kajaが想定される。

奄美方言と宮古方言の<神経痛>という意味が沖縄方言の例と八重山方言のうちの鳩間と石垣の語形にも見出せることから、<神経痛,関節痛>が琉球祖語形の意味で、八重山祖語では*kajaの意味はいったん<腕関節の痛み>に限定され、その後、方言ごとに腕のどこというさらなる指定が加わり、また方言によっては原義の<痛み>という意義素がとれて、カヤが様々な意味を表すようになっていったと考えられる。

5. 先行研究の語源説と音調

宮良(1984:282)は与那国方言のkajaを「かひなの転」とみて、「kaina>kaira>kaija>kaja」という派生を想定している。『日本国語大辞典』(第二版;小学館)もこれを踏まえてか、与那国のkajaと石垣のkaja<手足の甲>を「かいな」の方言形として掲げている。「かひな」を<腕>の義と解釈すれば、八重山方言での意味の発展は容易に説明できるが、一方では、宮古と奄美とで、<腕>→<腕関節>→<腕の関節痛>→<関節痛>と意味変化を想定しなければならないであろう。この同じ意味変化が宮古と奄美の二カ所で独自に起こっているということになるが、これはこの語源説の困難なところの一つである。また、発音の面からみても不都合なところがある。

カイナ<腕>の音調は、松森(2000)の分類では、B系列の音調型に属する。松森のこの分類は沖永良部島の方言音調による分類であるが、カイナという語に関していえば、今帰仁方言(henṅāa)、伊江島方言(k^heenja^ʔ)、与那国方言(_kanna)もB系列の音調であるし、またB系列とC系列が合流している首里方言(keena^⓪)と鳩間方言(kaina)では、音調はやはりB・C系列になっている。一方では、カヤは松森分類でA系列の音調になるのである。伊江島や今帰仁の方言は、音調の具現形が単語の長さに影響されるから、同じ長さのB系列名詞「肩」を比較のために挙げる。

	カヤ(A系列)	肩(B系列)
伊江島	hajā (語末アクセント)	hataɾa (無アクセント)
鳩 間	kajā (平板型)	ɾkata (起伏型)
石 垣	k̄aja (起伏型)	k̄ata (平板型)
与那国	ɾkaja (高平型) ⁴	ɾkataburuci (低平型)

祖語時代から、時間の推移とともに単語の発音(分節音・音調ともに)が変化して、実際の音調が方言によって大きく違ってくるが、同じ祖形から規則的に由来しているから、方言間の音調型は規則的な対応を見せている。伊江島のhajaも与那国のkajaも同じ祖形に由来するから、音調が対応する(両方ともA系列の音調)のはこのためである。もしカイナまでが同系の語形だとすれば、カイナも同じ系列の音調になっているはずである。同系の語彙は音調も規則的に対応するのが通則である事実を利用して、語源を探ることができる。琉球方言からその一例を次に挙げる。

与那国方言を除いたその他の八重山諸方言が形成する方言群を中核八重山方言群(英:Nuclear Yaeyama)と呼ぶことにする。中核八重山祖語に<背中の上の方>の意味で*kazeeraが再建できそうである。

石 垣	kazeera	<背中の上の方。肩甲骨の辺り>	(宮城他2002:192)
宮 良	kazeera	<肩胛骨>	(仲原2002:146)
川 平	kazerabuni	<かいがら骨>	(中本1975:17)
新 城	kazeera	<肩>	(久野1992:53)
古 見	kazira	<肩甲骨から肩・首あたり> ⁵	
波照間	kacira	<肩>	(加治工1975:20)

石垣方言形は起伏型音調であるから、この語はA系列の音調であると推察できる。一般に、琉球方言の複合語の音調の系列は、複合語の前部成素の系列に従うから、A系列の*kazeeraが音調がB系列である*kata<肩>から派生してできた語である蓋然性は低い。音調からみて、中核八重山祖語の*kazeeraの語源はむしろ中核八重山祖語の*kazi<首筋>に求められる可能性が高いと考えられる。石垣方言のkazi<首筋。首の後ろの部分。うなじ>(宮城他2002:193)もA系列の起伏型音調であるし、次の資料が示すように、琉球祖語にもA系列の音調の*kaziが再建できる。

徳之島目手久	kazi	〈後〉	(高橋1985:260)
徳之島亀津	kazi	〈後頭部。背後。身体の後ろの部分〉	(平山1986:37, 98, 400)
与論	hazi	〈首筋〉	(高橋・菊(未刊))
今帰仁	hazii	〈首すじ。うなじ〉	(仲宗根1983:505)
伊江島	hazi	〈首筋。うなじ〉	(生塩1999:302)
首里	kazi①	〈うなじ。えりくび〉	(国立国語研究所1963:318)

中核八重山祖語の*kazeera〈背中の上の方〉が波照間と新城で意味推移して〈肩〉になるが、ローレンス(2000)ではこの二方言が(白保とともに)一つの方言群を成すことを論じた。従って、〈背中の上の方〉から〈肩〉への意味推移はこの二つの方言で独立して起こったのではなく、波照間方言と新城方言が分化する以前に起こった変化であると考えられる。また、宮良(1984:311)は、竹富方言と鳩間方言のkazeera、黒島方言のhazeeraが〈二の腕〉を意味するという。この三つの方言も一つの方言群を形成するから、この意味推移も一回しか起こっていないと考えられる。

6. 結論

本稿では、北は奄美大島の佐仁から、南は与那国まであらわれるカヤ系の単語を、奄美と宮古の方言形の意味を重要視して、原義を〈神経痛、関節痛〉として再建してみた。沖縄方言である伊計島と伊江島の対応形に、多少意味の範囲の拡大・縮小が見られるものの、基本的には祖語の意味を色濃く受け継いでいるといえよう。八重山祖語ではカヤの意味は〈腕関節の痛み〉に変化したとみられる。八重山の鳩間方言の〈肩の病気〉や石垣方言の〈仕事で使いすぎて手首が痛くなること〉に、身体部分に制限が加わっているものの、原義はまだ保たれている。その他の八重山諸方言では、身体部分が優先され、原義の〈痛み〉がカヤの意味から消失している。

再建形の音形は*kajaで、音調は松森分類のA系列になる。

北琉球方言群では、カヤ系の語形は周辺分布をなしているが、その要因の一つとして〈手首の関節痛〉という意味の別語の存在が指摘できると思われる。

喜界島志戸桶	tizja	〈手首が曲がらなくていたい病気〉	(中本1978: 4)
笠利町佐仁	tizja ⁶	〈手首〉	(琉球方言研究クラブ2002:86)
大和浜	thizja	〈手くびがある期間硬直状態になること〉	(長田・須山1977:175)
湯湾	tizja	〈手首の曲がる部分〉	(中本1976:14)
沖永良部知名	tiizja	〈仕事で、使いすぎて手首が痛くなること〉	(平山1986:490)

- 沖永良部和泊 tiizja <仕事で、使いすぎて手首が痛くなること> (平山1986:490)
 伊 江 島 thizja <神経痛の一種> thizageenja <手首の神経痛> (生塩1999:227)
 首 里 tiiza① <手首の痛むこと> (国立国語研究所1963:520)

この語形は明らかに<手>という形態素を含んでいるのである(音調も<手>と同じB系列)が、後部成素の認定はむずかしい。北琉球祖語に*ti-zjaと、口蓋化をうけた子音を再建する必要がある。というのは、後の時代に起こった口蓋化を蒙らなかった方言(例えば、沖永良部知名kjurasan<きれい>, kikjun<聞く>参照)においても、この単語では口蓋化が起こっている。北琉球祖語では、/i/が口蓋化を起こしていない(知名kikjun<聞く>参照)から、口蓋化を起こしたのは[i]より口蓋性が一段と強い[j]であろうと考えられる。⁷すると、次のような派生が想定できよう。

*ti-zja < *ti-gja < *ti-gaja < *ti<手> + *kaja <関節痛>

*ti-gajaからの母音脱落は不規則的な音変化と思われるが、この*ti-zjaという新語形が出来た結果、*kajaの使用範囲が浸蝕されたのは想像に難くない。

なお、笠利町佐仁と宇検村湯湾とで、tizjaが疾患名から身体部位名に転じていることは、kajaの場合に八重山でおこった意味変化と同じである。佐仁方言話者で大正一桁生まれの方はtizjaの意味が<手首の痛み>になっているが、⁸ 大正末期以降の生まれの話者になると<手首>という意味に解釈されるようになる。⁹ tizjaを<手首の痛み>と説明する大正8年生まれのインフォーマントはこの語形をtizja-nu jajun<ティジャが痛い>というふうにするが、大正2、3年生まれの話者はこうは言わないというから、これを過渡的な段階とみることができよう。

疾患名が身体部位名になるのは、世界的にみてもあまり例のないことと思われるが、その疾患名の使用頻度が低い上に、その疾患が発生する身体部位に名称がない場合、疾患名はその身体部位名として誤って解釈され、その誤解釈が新意味として定着するということが充分考えられよう。本稿で論じた、八重山でのkajaの意味変化と、奄美大島の佐仁と湯湾のtizjaの意味変化はこのようにして起こったであろう。

7. 補説

本稿を提出後、『瀬戸内海方言辞典』(藤原与一著、1988年刊、東京堂出版に「カヤガタタン」<(病中病後の人または老人・けが人の)脚腰がたたない>の例を見付けた。この慣用句は愛媛県大三島肥海方言のもので、この「カヤ」は<脚腰><脚腰の自由>ほどの意味と見られており(同書213頁)、アクセントは金田一分類の2・3類である。琉球祖語の*kajaのA系列アクセントは金田一分類の1・2類に相当するので、肥海方言の「カヤ」

が琉球祖語の *kaja と同系なら、日琉祖語に *kaja (2類) が再建できよう。

注

- ¹ 沖縄県立芸術大学非常勤講師である仲原穰氏の調査ノートによる。字石垣出身のインフォーマントは大正7年の生まれで、日常語として方言を使っているとのことである。
- ² 本稿中の仲地方言の資料はすべて仲地出身の富浜定吉氏が提供して下さった。
- ³ ここの *naïïi* は [naʒʒi] である。*/nazzi/ だったら、音声は *[naddʒi] になるはずである。
- ⁴ 音調は仲原穰氏の調査ノートによる。
- ⁵ 古見出身の大底朝要氏(昭和9年生まれ)からの私信による。
- ⁶ 佐仁方言の *tizja* は *tizja* とも解釈できるのである。佐仁方言では、/t,d/ の直後では /i/ と /i/ の区別が中和され、[i~ɪ~i] と発音される(狩俣2003:5)。
- ⁷ 知名方言のように、*kikjuN* <聞く> のように口蓋化をうけていない -kj- があるということは、北琉球祖語の段階では、ここはまだ -kj- でなかったことを物語っている。
**kikiwomu* であったと思われる。語末の *u* は沖永良部^{ててちな}手手知名方言にみられる(服部・上村・徳川1959:416)から、北琉球祖語に再建できる。*Serafim*(1984:158-61)も参考になる。
- ⁸ 西 亀二氏(大正2年生まれ)、泊ウミソ氏(大正3年生まれ)、安田ヨシ氏(大正8年生まれ)がこの情報を提供して下さった。
- ⁹ 琉球方言研究クラブ(2002:86)の *tizja* <手首> は大正15年生まれの米田イク氏から採録した。前田良吉氏(昭和16年生まれ)と友原(旧姓西)通子氏(昭和25年生まれ)も <手首> として解釈している。

謝辞

本論を草稿の段階で読んで、有益なコメントを下された沖縄県立芸術大学の仲原穰氏と西岡敏氏、ならびに琉球大学法文学部の島袋盛世氏に感謝の意を表す。

名前は注の中で挙げたのでここでは割愛するが、時間を惜しまずに、快く方言の発音および使い方を教えて下さったインフォーマントの方々に心からお礼を申し上げる。

最後に、いわゆる「基礎語彙」以上の方言データの収集・公表に努めてきた研究者にもお礼を述べる。

参考文献

- 沖縄国際大学高橋ゼミ 1986. 『琉球の方言』11. 法政大学沖縄文化研究所.
 長田須磨・須山名保子(編) 1977. 『奄美方言分類辞典 上巻』笠間書院.
 生塩 睦子 1999. 『沖縄伊江島方言辞典』伊江村教育委員会.

- 加治工真市 1975. 「波照間方言について」沖縄県教育委員会(編)『波照間の方言』1-30.
- 加治工真市 1982. 「沖縄県竹富町の方言」平山輝男(編)『全国方言辞典2』386-96. 角川書店.
- 加治工真市 2001. 「古見方言の基礎語彙」『沖縄芸術の科学』13:1-101. 沖縄県立芸術大学附属研究所.
- 狩俣 繁久 2003. 『奄美大島笠利町佐仁方言の音声と語彙』「環太平洋の言語」成果報告書A4-014.
- 金城三早江(編) 1982. 『琉球方言』16. 琉大琉球方言研究クラブ.
- 久野 眞 1992. 「新城下地島方言の音韻」『南琉球新城島の方言』36-66. 國學院大學日本文化研究所.
- 国立国語研究所(編) 1963. 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局.
- 柴田 武(未刊). 「宮古方言語彙」. (「宮古音声データベース」として<http://www.ocls.u-ryukyu.ac.jp/rlang/myk/index.html>に公表)
- 高橋 俊三 1985. 「徳之島伊仙町方言の語彙(中間報告)」『徳之島調査報告書(3)』173-323. 沖縄国際大学 南島文化研究所.
- 高橋俊三・菊千代(未刊). 「与論島方言辞典(仮称)」.
- 多良間村史編集委員会(編) 1993. 『多良間村史民俗』多良間村.
- 仲宗根政善 1983. 『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店.
- 仲原 穰 2002. 「石垣島宮良方言の音韻研究序説」『琉球の方言』27:139-157. 法政大学沖縄文化研究所.
- 中本 正智 1975. 「語彙」『琉球の方言—八重山石垣島川平方言—』12-66. 法政大学沖縄文化研究所.
- 中本 正智 1976. 「語彙」『琉球の方言—奄美大島宇検村湯湾方言—』11-73. 法政大学沖縄文化研究所.
- 中本 正智 1978. 「喜界島志戸桶方言の語彙」『琉球の方言—奄美喜界島志戸桶—』1-63. 法政大学沖縄文化研究所.
- 服部四郎・上村幸雄・徳川宗賢 1959. 「奄美諸島の方言」九学会連合奄美大島共同調査報告書『奄美自然と文化』403-32. 日本学術振興会.
- 平山 輝男 1983. 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社.
- 平山 輝男 1986. 『奄美方言基礎語彙の研究』角川書店.
- 平山 輝男 1988. 『南琉球方言の基礎語彙』桜楓社.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 1967. 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院.
- 松森 晶子 2000. 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の

調査から一」『音声研究』4:1. 61-71.

宮城信勇・加治工真市・波照間永吉・西岡敏(編) 2002. 『石垣方言語彙一覽』

「環太平洋の言語」成果報告書A4-017.

宮良 當壯 1980[1930]. 『八重山語彙』宮良當壯全集8. 第一書房.

宮良 當壯 1984. 『日本方言彙編』宮良當壯全集2. 第一書房.

琉球方言研究クラブ 2002. 「琉大方言第17号奄美大島笠利町佐仁方言の民俗語彙」.

ローレンス・ウェイン 2000. 「八重山方言の区画について」石垣繁(編)『宮良當壯記念論集』547-59. ひるぎ社.

Serafim, Leon 1984. *Shodon: The prehistory of a Northern Ryukyuan dialect of Japanese*. Yale University PhD dissertation.